

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：12301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730859

研究課題名(和文) 盲ろうおよび感覚障害を有する重複障害児の共同注意に関する実践的研究

研究課題名(英文) Action Research on Joint Attention for Children with Deafblindness and Multiple Disabilities with sensory impairment

研究代表者

中村 保和 (Nakamura, Yasukazu)

群馬大学・教育学部・准教授

研究者番号：60467131

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円、(間接経費) 570,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、盲ろうおよび感覚障害を有する重複障害児の共同注意行動の様相を明らかにするとともに、こうした子ども達の初期コミュニケーションにアプローチする係わり手のあり方について吟味・検討することである。以下には、知的障害を有する弱視児を対象にした教育実践の経過を記録したビデオ映像の分析をもとに、とりわけ、共同活動の成立や三項関係の成立に重要な条件としてあげられる「注意の分配」の様相や成立条件について考察した結果を報告する。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the present study was aspects of Joint Attention for children with deafblindness and multiple disabilities with sensory impairment, and to clarify a method of the approach on initial communication. In the following, the video tape which recorded the progress of interactions with child who has residual vision and mental retardation was analyzed. As a result, some conditions of the allocation of attention were clarified, which is very important to establish triadic interactions.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：特別支援教育

キーワード：重複障害 コミュニケーション 共同注意 教育実践研究

1. 研究開始当初の背景

(1) 共同注意の研究

共同注意とは、他者と関心を共有する事物や話題へ注意を向けるように行動を調整する能力である (Bruner, 1975)。この共同注意が養育者を主とする大人との間で成立することは、乳幼児期において獲得する認知能力や言語能力の基盤となるスキルを身につけた兆しであるとして、その重要性が指摘されている (Bakeman & Adamson, 1984; Bruner, 1977)。この共同注意という概念は、乳児における視線の後追い現象に端を発し、とりわけ乳幼児発達研究において、言語獲得における重要なキーワードとして注目されるようになった。さらに、その後の研究では、養育者と乳児が互いに相手の注意の焦点を知っているという共同注意の背後にある「共有性」の問題が指摘されるなどして (Baldwin, 1995; Tomasello, 1995)、共同注意という概念そのものが、視線の追従といった狭義にとられることなく、他者へ始発する提示・手渡し・交互凝視などの様々なやりとりを含めた相互交渉へと解釈を広げるようになった。

(2) 盲ろうおよび感覚障害を有する重複障害児の初期コミュニケーションに関する研究

生まれながらに、あるいは生後まもなくからの視覚聴覚二重障害(以下、「盲ろう」と記す)あるいは感覚障害を有する重複障害児の場合、言語獲得期の前に視覚と聴覚の双方に障害が生じるため、こうした子どもたちの通常の言語発達(いわゆる自然言語発達)は、極めて困難である (Chen & Haney, 1995) と言われている。また、こうした感覚障害に知的障害や運動障害などをあわせ有した場合、その困難はより一層となることは想像に難くない。徳永(2003)は、生後8か月以前の定型発達乳児の共同注意関連行動と重度・重複障害児の事例研究等から考えられる行動を取り上げ、乳児の行動指標を手がかりに重度・重

複障害児の行動をみていく場合の課題について検討する中で、障害を有する子どもであっても、制限された機能を補いながら自分への係わり、他者への係わり、物への係わりを高めていることを想定し、そうした機能を補う行動を検討していく必要性を指摘している。さらに、重度・重複障害児の対人相互行動の発達やコミュニケーション行動の発達を検討していく際に、共同注意に関する関連行動が1つの指標となることを指摘した。土谷・菅井(2000)や中田・峰(2002)、土谷(2002)では、子どもの自発する行動の中に分析的に意味を見い出し、その解釈を働きかけとして返しつつ、子どもの反応からかわり手の働きかけの是非を問うという相互主体的な関係性の中でコミュニケーションの成り立ちを捉えようとする「ネゴシエーション」という視点から、初期的なやりとりの中での身振り系身体表出に関する実証的なデータを盛り込んだ報告を行っている。

このように、盲ろうおよび感覚障害を有する重複障害児のコミュニケーション研究において、対象児(者)と係わり手との初期的なやりとり、すなわち初期コミュニケーションは従来から非常に重要なテーマであり、近年の乳幼児を中心としたコミュニケーション研究の知見である「共同注意」という概念は、そうしたテーマに対する新たな接近方法であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、盲ろうおよび感覚障害を有する重複障害児との相互交渉における共同注意成立条件について、実際的な係わり合いの経過の中で明らかにすることである。

本報告においては、知的障害を有する弱視児(1事例)との係わり合いの経過で見られた共同活動場面をもとに、感覚障害を有する重複障害児の共同注意行動の様相について明らかにすることである。その際、「注意の分配」に焦点を当てて分析することとした。

3. 研究の方法

(1)対象児について(研究開始当初)

対象児(以下『V』と記す)は盲学校小学部(重複学級)2年生に在籍する女兒である。

①障害状況：弱視、知的障害

②視覚について：矯正視力 0.06。光る玩具やビニールフィルムなどを好み、それらを自身の手を持って、自身の鼻先に接するぐらいに近づけて見ようとする。

③聴覚について：異常なし。キーボードから流れる音楽や玩具の電子音などを好んで聴く。

④運動について：自宅のソファなどへの自力での上り下りが可能。自らジャンプしたり、係わり手と手をつなぎながらジャンプしたりすることができる。係わり手がガイドをすると、はさみなどを使って画用紙や折り紙などを切ることができる。

⑤周囲の状況把握とコミュニケーションについて：「ミルクを飲もうね」などと声をかけると、所定の場所に哺乳瓶を取りに行く様子が見られる。また、「絵本を見ようね」や「(自宅2階にいる状況で)これから下に降りるよ」など、日常的に頻繁に経験している事柄については、係わり手の言葉かけを受けてそれに応じた行動を起こすことができるが、新しい出来事や単発の活動などは、言葉かけのみでは理解することが難しく、実物の提示などを行って伝えている。写真や絵などを提示するとそれに視線を向ける様子は見られるものの、それが現時点の活動、あるいは直後の予定(活動提案)を示していることを理解することは難しい。発信手段としては、係わり手の手を引いたり、「だっこ」、「パッチン(遊びの名称:詳細は後述)」などのいくつかの単語で要求を発信したりする。

⑥食事:エンシュアリキッド(高カロリー栄養剤)を哺乳瓶で摂取。

⑦排泄:おむつを使用。声掛けに応じてトイレ

で用を足すことができる場合もある。

(2)働きかけの方法と分析資料の収集

週1回程度、Vの自宅を訪問し、Vの家庭での活動が円滑に進行するように援助した。さらに、Vの活動が停滞したり、進行している活動(遊び)などが飽和状態になった際には、係わり手が活動提案としてVが関心を示す玩具を提示したり、新たな遊びを提案するなどした。こうした働きかけの意図は、Vが示す関心や興味に係わり手自身が注意を重ねることによるVとの活動の一体感や場面の共有(共同活動)を成立させるためである。こうした係わり合いの経過を毎回、デジタルビデオカメラで記録し、共同注意場面の分析資料とした。

4. 研究成果

以下においては、本研究期間におけるVとの係わり合いの中で確認された共同活動場面の中から、共同注意の成立とその発展に関するエピソードを記述する(係わり開始後5か月~1年11か月までのエピソードを抽出)。

(1)係わり合いの背景および問題

Vは光る玩具やビニールフィルムなどを特に好み、また電子音の玩具なども好むため、モノへの接近は頻繁に生じる。モノへの接近方法としては、手にしたモノを眼前に(モノが鼻先に着くほどに)近づける、眼前で振って光や影のコントラストを作って楽しむなどである。また、口元に持って行って唇に触れさながら小刻みにモノを動かすといった、自ら感覚刺激をつくり出して没頭するといった様子であった。人との係わり合いにおいては、抱っこを好み、抱っこされながら係わり手の歌う歌に聞き入ったり、揺らしたりジャンプしたりするなどを好んだ。このようにモノへの接近、人への接近は頻繁に生じるものの、係わり手と玩具や遊具を共有して共同的な活動を行うことはなかなか生じなかった。例えば、Vが頻繁に目を向ける絵本など

を係わり手が一緒に開いて見ようとする、自身の唇を近づけたりページをパタパタと手で弾いたりして、係わり手と一緒にすることは困難であった。また、V が好む音の出る玩具の操作ボタンを一緒に押す、交互に押すなどのやりとりを展開しようとする、始めは音の出るボタンに注意を向けるものの、係わり手の操作に注意を向ける様子が乏しく、共同的な活動に発展していかない。

こうした事態を捉えて、係わり手は先述したように、係わり手がVの注意を追うとともに、注意を重ねていく働きかけを行い、V が係わり手とモノを介して係わり合う、すなわち、V が自身の注意をモノと係わり手(人)の両方へ向ける(注意を分配する)様子がVに現れ、そしてそれが維持されていくことを係り合いの目標とした。

(2) 共同注意行動の具体例(エピソード)

①エピソード 1:玩具への接近と共同注意の萌芽

Vは自身の手でビニールフィルム(以下『フィルム』と記す)を持ち、眼前で振りながら視覚刺激をつくり出している。係わり手(以下、『A』と記す)はフィルムの動きに合わせて「キラキラ」、「パタパタ」などと擬音でフィルム遊びの共有を試みる。VはAの言葉かけを聞きながら、時に「キラキラ」、「パタパタ」などと模倣的(あるいは反響的)に返してくる。AはVのそうした応答に合わせて、色や形の異なるフィルムを手渡していく。Vは最初、差し出されたフィルムに視線を向けて受け取るのみであったが、次第に、受け取る際にAの方向に視線を向けるようになる。さらには、AがVの遊びに応じて「キラキラ」や「パタパタ」と声をかけた際にも、Aの方に視線を向けたり、Aの口元に自身の目を近づけたりして注視する様子も見られるようになった。

②エピソード 2:対面共同注意の成立

AがVにフィルムを手渡ししながら遊びが円

滑に進行することを援助している中で、Vが自らフィルムを自身の顔に貼りつけることを始める。Aはそれを模倣的に受けて自身の顔に貼りつけて、自身の顔をVに近づけてみる。すると、Vはそれに視線を向けて、笑顔を見せながらAの顔に貼られたビニールフィルムに手をのばす。VはAと向かい合い、Aの顔(額や頬、瞼)などに貼られたフィルムを剥がすのに夢中になる。その際、Aの顔のフィルムを探すために自身の顔をAに近づけてAの顔をじっと見つめるようである(視覚探索)。また、AがVの前でゆっくりとフィルムを顔に貼りつける様子見せると、ここでもVにA(あるいはAの動作)を注視する様子がみられた。こうしたやりとりの中でお互いの視線が合う様子も確認された。

③エピソード 3:対面共同注意の展開

AはVに風車を提示して吹いて見せる。Vは風車が回転する様子に注目する。Aは「クルクルクル・・・」と言いながら風車を吹き続けると、Vも「クルクル・・・」と言う。AとVが向かい合ってお互いの顔の間に風車を置き、双方が吹き合うようにやりとりを展開すると、「せーのっ」という掛け声に合わせて一緒に吹いたり、交互に吹いたりするなどのやりとりが生じる。

Vの視線は、回る風車とAの口元(あるいは顔全体)の双方に向けられている。

④エピソード 4:モノと人との視線の往復

Vが自身の胸の前あたりでフィルムを持っている際に、AはVの横に並びながらペンライトを持ち、Vの持つビニールフィルムに照射する。Vは照射によって作り出される反射光に喜び、自らフィルムを傾けたり振ったりしながら光の反射の加減を調節しようとする。AはVのこうした行動に同期させるようにペンライトを動かしてAとの活動共有を試みる。双方の間に「ピカピカ」「キラキラ」などの言葉の掛け合いも生じ、反射をつくり出す活動が双方の間で共有される。こうした

中で、V は自身の持つフィルムと A が持つペンライト(+A の手)の双方の間で視線を往復させるようになる。二つ(フィルムとペンライト)の関係をj確認しているかのような視線の動きとして捉えることができる。

⑤エピソード 5: 音を介した共同注意-注意の分配-

V はフィルムを自身の両手で持ち、それを曲げたり弾いたりしながら音を出している。A はその音を真似るように自身もフィルムを使って同じような音を作り出す。さらに、A がフィルムを弾くタイミングに合わせてV は「パッチン」と言い、V の注意の対象に自ら注意を重ね合わせていく。すると、V はA の「パッチン」という言葉かけに合わせて自身のフィルムを折り曲げるようになる。また反対に、A がフィルムを折り曲げるのに視線を向けながら「パッチン」と言う。

擬音様の言葉かけに支えられながら、フィルムを折り曲げたり弾いたりする操作が共同的に行われる。こうしたやりとりの中で、V の視線はフィルムに向けられているが、A の声掛けやA がフィルムで作rり出す音に合わせるように自身の手の動き(フィルムを折り曲げたり弾いたりする動き)を調整している。すなわち、V は眼前のフィルム(モノ)と係わり手(人)に注意を分配しながら活動を展開していると捉えることができる。

(3) 考察

①共同注意の成立について

V と A との間で活動が共有されるにあたっては、まずはV が注意を向ける対象にA 自身が注意を向ける、あるいは注意を重ね続ける構えが必要であった。そしてさらに、注意を向けた対象そのものがV にとってどのような楽しみ、あるいは面白さなのかをイメージし、それに接近するための具体物(玩具)を用意し、さらにそれを通して共同的な活動を作り上げようとする働きかけや構えが必要であった。

すなわち、V が強い関心を示したビニールフィルムは、①色、反射、影、動きそのものといった視覚刺激、②「パッチン」、「パタパタ」といった玩具そのものから出る音、またはその音を擬音化した音声(A の言葉かけ)といった聴覚刺激、③ビニールフィルムが曲がる感触や振動などの触覚刺激、これらの要素を持っていた(あるいは創り出していた)。係わり手は、子どもが注意を向ける対象(モノ)だけでなく、そのモノが生み出す刺激要素にまで注意を向けることが重要である。そうすることで、対象児のモノの世界を広げるだけでなく、新たな共同活動の糸口を見出すことにもと考える。

②共同注意の特徴と意義

係わり手がV との間に目指した共同活動は、換言すれば「注意の分配」を「誘い」、「共有する」ということであった。すなわち、V はビニールフィルム(ビニールフィルムが作り出す刺激)に関心を示した。係わり手はそのモノを用いて、またはそこに含まれる要素を意図的に作り出して、V の注意を引きつけ係わり合いの展開を試みた。だが、それは提示したモノに注意を向けるように促したのではなく、そのモノの背後に構える人(係わり手;A)に注意を向けるように促したのである。情緒的な表現を援用すれば、「モノを通して人とつながる」ことを目指したのである。この「人とつながる」の意味するところをエピソードに還元して捉え直すならば、V が提示されるフィルムから作り出される様々な刺激を楽しむのと同時に、この刺激を作り出している人に視線を向けたり、そこに手を伸ばしたりするなどの係わり手への接近行動が生じることであろう。こうした姿は、V がモノと人に注意を分配して活動を展開していることを示す。この「注意の分配を誘い共有する」ことができた場面を詳細に分析することは、共同活動の成立条件を明らかにする際の重要な視点であるjと考える。さらに、初期

コミュニケーションの観点からも、V のこうした姿を「要求発信」や「係わり手への意識」といった子どもから係わり手への一方向的な現象と捉えるのではなく、子どもと係わり手が互いの関心に注意を向け合い、互いの動き(動作)を調整し合うプロセスの中で生じた出来事として捉えることができる(共創)。このように、共同活動を共同注意の観点(とりわけ注意の分配)という観点から分析することは重複障害の子どもたちの初期コミュニケーション研究に新たな側面(切り口)を提出することになるのではないだろうか。

共同注意の観点から、子どもとの間に生じた共同活動を捉え直すことの意義は大きい。

5. 主な発表論文等

[学会発表] (計 2 件)

- ① 先天性盲ろう児との共創コミュニケーションの様相・Dyadic interaction に関する実践をめぐって- 日本特殊教育学会第 51 回大会(2013 年 8 月 30 日～9 月 1 日)自主シンポジウム: 中村保和・岡澤慎一・土谷良巳・菅井裕行・笹原未来
- ② 障害の重い子どもが取り組む学習とは-その現代的課題と展望- 日本教育心理学会第 55 回大会(2013 年 8 月 17 日～19 日)自主シンポジウム: 土谷良巳・菅井裕行・岡澤慎一・中村保和・笹原未来

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 保和 (NAKAMURA, Yasukazu)

群馬大学・教育学部・准教授

研究者番号:60467131